白幡

校歌

作詞　寺田　彰司
曲　旧制一高寮歌「アムール川」

一
千秋の雪積もりたる
富士の高嶺の雄姿ぞ
幾万代の後までも
変わらぬ誠の鑑なる

二
奔流百里石をかみ
厳に激しいや増しに
勢加わる利根の水
これ剛健のためしなり

三
あゝ此の山と此の川と
日夕眺むる健男児
自然の示す巨人をば
如何に学ばん習わなん

四
白幡台の雪月花
四季の折々常総の
平野にしるく輝くは
高潔無垢の別天地

五
石段登る六十余
一足ごとに踏みかため
心を鍛え身を練りて
忠良有為の基たてん

目次

会長挨拶……2
校長挨拶……2
令和4年度総会報告……3
令和5年度総会案内……5
母校の想い出……6
母校と私の人生……11
トピック①……12
トピック②……14
同窓会HP紹介……15
進路状況……16
附属中学校……17
高校部活動状況……18
令和4年度定通大会……19
読者プレゼント……20
編集後記……20

竜ヶ崎第一高等学校内
白幡同窓会事務局
〒301-0844　龍ケ崎市平畑248
TEL 0297-62-2146　FAX 0297-62-9830
ホームページ　http://www.shirahata.sakura.ne.jp
メールアドレス　shirahatadousoukai@gmail.com
印刷所：倉沢印刷㈱　題字：秋山海堂（中21回）
表紙写真：石引写真館提供

ご挨拶

白幡同窓会会長
染谷　信洋

白幡同窓会会員の皆様にはご健勝にてご活躍のこととお喜び申し上げます。

日頃本会並びに母校の充実発展のために深いご理解とご支援を賜り心から感謝申し上げます。

本年は、三年ぶりに総会を開催することが出来ました。招待学年の皆さんも増えて賑やかな総会になり、感無量でした。来年も盛大に開催できることを祈っています。

春の教職員人事異動では同窓会でもたいへんお世話になった髙野健二教頭先生と川田利行教頭先生がそれぞれ竜ヶ崎二高、茎崎高の校長先生にご昇任になりました。おめでとうございました。どうぞ今後ともお元気で大いにご活躍ください。

在校生の皆さんも困難な状況のもと、学習面で部活動面で実によくがんばってくれています。さすが竜ヶ崎一高の生徒諸君です。

文科省のSSH（スーパーサイエンスハイスクール）活動関係では、今年は世界遺産である小笠原諸島の父島で研修をしたいということで同窓会でも応援をさせていただきました。充実した体験ができたということでした。喜ばしい限りです。

部活動面でも野球部の皆さんががんばって夏の県大会ではベスト8に進出してくれました。準々決勝では甲子園出場を決めた明秀日立に惜しくも敗れましたが健闘してくれました。これからも甲子園を目指してがんばってください。

そして男女ソフトテニス部、女子弓道部、射撃部、書道部、吹奏楽部等々の皆さんが目覚ましい活躍をしてくれています。嬉しい限りです。

来年度から竜ヶ崎一高は単位制に移行するそうです。さらに個性が生かされ充実した高校生活が送れることを期待しています。

卒業生もがんばっています。野球部OBの皆さんが『Rの軌跡120年』という大冊の部誌を刊行しました。

茨城の高校野球の歴史を切り開いたと言っても過言ではない竜ヶ崎一高の野球部です。北関東で初めて甲子園に名乗りを上げた野球部です。我々卒業生一同にとっても誇りに思っている存在です。立派な部誌をまとめた関係者の皆様に心から敬意を表します。

奇しくも今年は日本に野球が伝わって百五十年です。正岡子規や夏目漱石が愛した野球です。いい記念になりました。

世界の情勢を見れば、ロシアによるウクライナ侵攻があり、気候変動による異常気象があり、多くの国が苦しんでいます。

また、わが国では歴代最長の総理大臣を務めた安倍晋三氏が凶弾に倒れました。そして世界的に親しまれ愛されていた英国のエリザベス女王が在位七十年というとてつもない足跡を残して逝去されました。

私たちは今大変な時代に生きていることを実感しています。しかし、こういう時代だからこそしっかり足元を見つめ、世界の動向にも注目していきたい、そして前を向いて生きていきたい、そう思います。

竜ヶ崎一高の生徒諸君にもミクロとマクロの視点を併せもってがんばって生きていってほしいと切に願っています。

「石段登る六十余　一足ごとに踏みかため　心を鍛え身を練りて」私はこの校歌が好きです。

この思いを胸に過ごす白幡台の高校時代こそがその後の人生の確固たる土台になると私は信じています。

来年はよい年になることを信じて役員一同心してまいります。どうぞ今後ともよろしくお願いをいたします。

皆さんにとって、来年がよい年になるよう心からお祈り申し上げます。

地域をキャンパスに深い学びを目指す

校長
太田垣　淳一

日ごろから学校運営にご理解、ご協力いただき、まことにありがとうございます。コロナ禍にあっても、みなさまご健勝のこととお喜び申し上げます。

さて、今年はコロナ禍への対策緩和を受け、地元龍ケ崎市の伝統芸能「撞舞」が3年ぶりに開催されました。本校では、地域課題の解決を通じた探究学習を導入しつつありますが、その一環として附属中生がグイグイ地域に分け入って活躍してくれました。主役の「舞男」を含む関係者に敢然とインタビューを行い、およそ1週間前から毎日、SNSで地域に向けた情報発信を行いました。足を運べない大勢の市民がこの遺産に触

れられるよう、当日も動画のライブ配信を行い、ご好評をいただきました。

「撞舞」に限らず、地域振興のために生徒の力を借りられないか、というお声を最近よくいただきます。その中には、少子高齢化にあえぐ地域の悩みを含むものが数多くあります。確かに、ほんの四半世紀前まで、龍ケ崎市中心街は肩がぶつかるほどの賑わいを誇っていたと聞きます。それが今では、営業を維持する店舗がまばらとなり、子どもたちの足も遠のく状態となってしまいました。

竜一と地域社会は運命共同体です。生徒の通学を支える「竜鉄」こと関東鉄道竜ヶ崎線の存亡を考えるだけでも、竜一にとって地域が持つ意味の大きさは明白です。にもかかわらず、部活動のパフォーマンスで花を添える以上の動きは、これまであまり盛んではありませんでした。

先般更新された学習指導要領では、探究活動を通じた課題解決力の育成が叫ばれています。混沌とした時代は、複雑な社会課題の解決を通じて自己実現を目指す、自立した個を求めています。教科書の上で断片的な「正解」を与えるだけの学びは、これまでも幾度となく批判されてきましたが、「失われた30年」を経て、今やっと変化が起きようとしているのです。

本物の地域課題に、唯一無二の正解はありません。だからこそ、「教員→生徒」「大人→子ども」といった一方的な関係に縛られない、開かれた生徒主体の学びが可能となります。教室で得た形式知を幹として、地域のリアルを通じて手にした暗黙知をもって枝葉となす。そんな深みある学びが、国際社会が求める前掲のような人材を育みます。そして10代の生徒たちも、それに応える潜在力を持っています。環境活動家のグレタ・トゥーンベリさんのような人材を例に出すまでもなく、冒頭の附属中生はすでに、デジタル領域において地域の救世主役を果たしているのです。

折から、竜一における「教室外の学び」の主役だった部活動が、教育課程外に置かれ、地域移行に向かいつつあります。一見手痛い決断のようにも見えますが、地域と共に学ぶ学校づくりの一部、ととらえれば、追い風にも映ります。竜一は、変化をチャンスに変え、あくなき成長を目指す学校です。ぜひ同窓生のみなさまにも、リーダーの卵たちに範を示す地域の先輩として、引き続きご指導・ご支援いただけましたら幸いです。

総会報告

三年ぶりとなる白幡同窓会総会が、令和四年四月二日、竜ヶ崎一高体育館で開催されました。新型コロナウイルス感染予防・拡大防止策として、恒例の応援団、チアリーダーによる校歌・応援歌斉唱、吹奏楽部の演奏披露はありませんでしたが、百二十周年記念式典で上映されたプロジェクションマッピングが再上映され、令和二・三・四年度の招待学年の卒業生、役員や幹事を合わせて約百八十名の方にご参加いただき、盛会となりました。総会次第は次のとおりです。

一　開会の言葉
二　校歌斉唱
三　会長挨拶
四　校長挨拶
五　記念品贈呈
六　招待学年代表挨拶
七　新任者紹介
八　議事
　㈠令和三年度事業報告・決算報告
　㈡令和三年度会計監査報告
　㈢令和四年度事業計画案・予算案
　㈣学校現況報告
九　閉会の言葉

【本部役員】

会長　染谷　信洋（高15）
副会長　小倉　培夫（高20）
　関口　広行（高26）
　倉持　正男（高27）
　大和佐知雄（高28）
監事　山田　實（高26）
　有川　保（高33）
顧問　野口武太郎（中40）
　齋藤　佳郎（高8）
　横須賀英明（高10）

【校外幹事】

幹事長　山崎　睦（高31）
副幹事長　服部　俊夫（高25）
　櫻井　篤美（高29）
幹事　篠塚　文男（高28）
　横田　久（高28）
　川口　浩己（高29）
　赤塚　誠（高30）
　大野　雅之（高30）
　大野　雅彦（高31）
　小嶋　吉浩（高31）
　福田　道義（高31）
　本田　仁子（高31）
　岡田　晋（高32）
　宮本　順紀（高32）
　霜村　裕通（高33）
　磯山　佳美（高34）
　大野　金人（高35）
　坪井　龍夫（高35）
　福島　正明（高35）
　海田磨起代（高36）
　具志堅秀和（定56）

令和３年度　白幡同窓会収支決算書

収入総額　10,617,647円
支出総額　5,182,801円
差引残額　5,434,846円（次年度へ繰越）

（収入の部）　（単位：円）

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較 増	比較 減	摘要
1 繰越金	6,091,303	6,091,303			令和２年度より繰越 会計用　6,091,303円 常陽銀行（普）
2 入会金	1,698,000	1,680,000		18,000	全日制 6,000円×274名＝1,644,000円 定時制 6,000円×（5+1）名＝36,000円
3 協力金	3,000,000	2,827,000		173,000	ゆうちょ銀行扱い分 514件　1,107,000円 コンビニエンスストア入金分 860件　1,720,000円
4 雑収入	97	19,344	19,247		同窓会名簿販売還付金 19,300円 普通預金利息　44円
合計	10,789,400	10,617,647	△ 171,753		

（支出の部）

科目	本年度予算額	本年度決算額	比較 増	比較 減	摘要
1 事務費	1,070,000	1,018,610		51,390	
1 消耗品費	50,000	0		50,000	
2 支払手数料	280,000	249,923		30,077	サラト扱い手数料 148,500円 郵便局支払手数料 100,873円　等
3 印刷通信費	370,000	664,973	294,973		同窓会総会案内用葉書、切手代
4 広報費	170,000	21,714		148,286	ホームページ用運用諸費
5 旅費交通費	200,000	82,000		118,000	役員会・委員会交通費
2 事業費	4,820,000	3,664,191		1,155,809	
1 総会費	150,000	0		150,000	
2 会報発行費	2,900,000	2,818,950		81,050	会報33号印刷代 776,820円 会報郵送代 2,042,130円
3 会議費	170,000	22,603		147,397	役員会等経費
4 招待学年記念品費	0	0			
5 卒業記念品費	200,000	155,400		44,600	卒業証書ファイル購入代
6 部活動奨励金等	900,000	380,000		520,000	※20,000円+5,000円×出場人数（10万円限度） 関東（ソフトテニス部、柔道部、射撃部、吹奏楽部、陸上部） 全国（ソフトテニス部、書道、射撃部）
7 学校行事補助	300,000	87,238		212,762	SSH関連事業経費
8 国際交流基金	200,000	200,000			国際交流基金
3 慶弔費	100,000	0		100,000	
4 基金積立金	500,000	500,000			特別事業積立金
5 予備費	4,299,400	0		4,299,400	
合計	10,789,400	5,182,801	△ 5,606,599		

科目間の流用を認める
基金積立金（常陽銀行）　３年度末積立額　6,003,409
合　計　6,003,409

上記のとおり報告いたします。
決算報告日　令和４年３月19日
茨城県立竜ヶ崎第一高等学校　白幡同窓会長　染谷　信洋

監　査　書

令和３年度収支決算について，監査しましたところ証拠書類，通帳等すべてにおいて正確にして適正であることを認めます。
令和４年３月19日　監事　山田　實　㊞
監事　有川　保　㊞

令和４年度　白幡同窓会予算書（案）

収入総額　9,722,900円
支出総額　9,722,900円

（収入の部）　（単位：円）

科目	本年度予算額	前年度予算額	比較 増	比較 減	摘要
1 繰越金	5,434,846	6,091,303		656,457	令和３年度より繰越 内訳　会計用　5,434,846円 常陽銀行（普）
2 入会金	1,488,000	1,698,000		210,000	全日制 6,000円×234名＝1,404,000円 定時制 6,000円×（5+9）名＝84,000円
3 協力金	2,800,000	3,000,000		200,000	協力金 2,000円×1,400名＝2,800,000円
4 雑収入	54	97		43	預金利息等
合計	9,722,900	10,789,400	△ 1,066,500		

（支出の部）

科目	本年度予算額	前年度予算額	比較 増	比較 減	摘要
1 事務費	1,200,000	1,070,000	130,000		
1 消耗品費	50,000	50,000			事務用品
2 支払手数料	280,000	280,000			協力金振込手数料等
3 印刷通信費	500,000	370,000	130,000		切手・葉書購入，印刷代等
4 広報費	170,000	170,000			ホームページ用運用諸費
5 旅費交通費	200,000	200,000			役員会交通費等
2 事業費	5,520,000	4,820,000	700,000		
1 総会費	450,000	150,000	300,000		総会経費 招待学年懇親会補助
2 会報発行費	2,900,000	2,900,000			会報34号発行印刷、発送料
3 会議費	170,000	170,000			役員会等経費
4 招待学年記念品費	400,000	0	400,000		総会記念品（校章入り白萩しのぎ湯呑み）制作費
5 卒業記念品費	200,000	200,000			卒業記念品代（卒業証書ファイル）
6 部活動奨励金等	900,000	900,000			部活動奨励金等
7 学校行事補助	300,000	300,000			SSH関連事業経費、高大連携経費等
8 国際交流基金	200,000	200,000			国際交流補助
3 慶弔費	100,000	100,000			弔慰金等
4 基金積立金	500,000	500,000			創立130周年式典に向けての積立
5 予備費	2,402,900	4,299,400		1,896,500	
合計	9,722,900	10,789,400	△ 1,066,500		

科目間の流用を承認願います。

上記のとおり提案いたします。
令和４年　３月１９日

茨城県立竜ヶ崎第一高等学校　白幡同窓会会長

令和５年度　同窓会総会のご案内

令和５年度　白幡同窓会　総会

１　日時　　令和５年４月８日（土）　午後２時　開会予定
２　場所　　茨城県立竜ヶ崎第一高等学校　体育館

令和４年度の白幡同窓会総会は３年ぶりに開催され、３つの学年が招待学年の対象となる異例の総会形式になりましたが、その結果総勢１８０名の同窓生が一堂に集まることができました。同窓会事務局としては、総会参加者数が１００名を超えることを目標にしていましたので、これを弾みにして総会参加者が増える企画等を考案していきたいと考えています。

令和５年度の総会については、４月８日（土）午後２時から竜一高体育館にて開催する予定です。新型コロナウイルス感染状況等により予定を変更することがありますことをご了承ください。

今回ご案内の往復葉書を差し上げるのは、各卒業回の幹事の方々と、令和５年度の招待学年である高校２６回・４１回・５６回・６６回及び定時制１２回・２２回・３７回・５２回・６２回の卒業生全員になります。

なお、総会の案内が届かない同窓生の方々の参加を大歓迎いたします。参加ご希望の方は下記同窓会メールアドレス、または、竜一高にご連絡ください。

オリジナル校章入りの「白萩釉鎬湯呑」の贈呈

招待学年の出席者の方と７０歳以上の出席者の方（１回限り）には、陶芸家・植竹敏氏（高 27 回）作製のオリジナル校章入りの「白萩釉鎬湯呑」を記念品として贈呈いたします。

なお、令和５年度より、総会に出席された８０歳以上の同窓生の方には、もれなくオリジナル校章入りの「白萩釉鎬湯呑」を記念品として贈呈いたします。

また、招待学年以外の出席者を対象に、抽選で３名の方に上記湯呑を贈呈する企画がありますので是非総会にご参加ください。

同窓会懇親会について

これまで総会の後に開催してきました「同窓会懇親会」については、昨年度から実施しないことになりました。

それに代わって、「招待学年単独による懇親会」を開催する場合については、同窓会本部より３万円の補助金を１回に限り、給付することになりましたのでお知らせします。

なお、日時及び場所等については招待学年幹事等で決めていただき、同窓会本部（下記メール）にご連絡ください。同窓会役員１名がその懇親会に参加させていただきます。

◎上記のことについて、ご不明な点があれば下記にご連絡ください。

白幡同窓会メールアドレス　shirahatadousoukai@gmail.com

母校の想い出

薄れ行く記憶をたどり

高16回
竹内美智子

卒業してかれこれ六十年、記憶も薄れて行く頃に「白幡」の原稿依頼が届きお断りしようと思いましたが、色々な場面でのつながりとかを感じ書いてみる事にしました。

当時の竜一高は、五組のうち二組に女子は十二、三人位で、成績の順位表がはられる為、緊張と勉強の毎日でした。

女子の体育は卓球が多かったように思います。部活は茶道部で東京のお茶会にも行きました。近くのお琴の教室にも通いました。当時兄弟が竜一にいるとPTA会費が免除になるという事、又兄二人が大学へ行っていて、私は就職する事になり、常陽銀行へ入りました。竜一から女子の入行は初めてのようでした。取手支店に配属、結婚してから茨城県内を転勤していました。日立支店の時、助川中のPTA会長が竜一卒の方と知りびっくりしました。谷田部支店へ転勤し、子供達も高校生となり転校はしないという事で、つくばのみずほ団地に居をかまえ、主人は単身、私はパート等をしてました。娘の通う牛久高校の校長先生も竜一卒の方でした。

退職してから団地の卓球クラブに入り、毎週金曜日健康目的で楽しくやっています。七十才になった頃、三人の子育て、十人の孫育てもだいたい終わり、昔習ったお琴もしてみたくなり、茎崎プラザで月二回火曜日に練習し、市の文化祭に出演、七夕コンサート、筑波山神社観月祭等色々参加しています。

私の学生の頃の夢は、社長夫人になる事、富士山の見える所に住みたいと言う事でした。主人はラッキーにもJCB茨城支社長に三年間でしたがなり、家の前も宅地開発で富士山が見えるようになりました。高校時代、佐貫駅から竜鉄に乗り毎日富士山を見ていました。

夢も叶い、卓球にお琴、何か高校時代に戻ったような気持ちで毎日楽しく過ごしております。当時学んだ事、色々な経験が基本になった人生、全てに感謝しております。

竜ヶ崎一高との接点と思い出

高16回
湯原　良夫

私は龍ケ崎市を離れて50年以上経過しました。現在は宮城県仙台市に住んでおります。令和4年9月初旬、白幡同窓会事務局より会報掲載の依頼が突然届き、何故私なのかとの思いがありましたが、記憶を辿って書いてみたいと思います。

最初に竜ヶ崎一高との思い出は、私が小学校低学年の時、父親から旧制龍ケ崎中の時に入学したが、貧乏であった為に中退したことを聞かされたことを思い出しました。そんな父親に竜ヶ崎一高の野球練習試合を見に連れていって貰いました。

その後、私は野球がしたくなり、中学校では、野球部に入部しました。旧大宮中学校です。3年間野球に没頭しました。中学3年生の夏休みには竜ヶ崎一高の夏練習に参加し、竜ヶ崎一高に合格した時は野球部に入り、野球をしたいと思っていました。幸い、竜ヶ崎一高に合格しました。先輩から野球部への入部を勧められましたが、体が小さいことから入部を断念しました。

その後、社会部？（名称は定かではない）に入部し、仲間と鎌倉大仏や鶴岡八幡宮等見学した思い出がありました。（仲間とは現在も交流あり）。また、仲間と自転車で成田方面に旅行した事もありました。先生方については、担任の野上先生より適切な指導を受けたこと、物理の石神先生の白衣での熱心な授業等が思い出されます。

又、文化祭では女装し、全員でフォークダンスをしたこと、全員参加の20㎞マラソン大会で完走したこと等思い出が蘇ってきました。

卒業後、大学に入り、大学2、3年生の時、竜ヶ崎一高が甲子園に出場し、応援に行ったこと。相手は報徳学園。全て懐かしい思い出でありました。

今後共、竜ヶ崎一高、白幡同窓会の益々の御発展を仙台から御祈念申し上げます。

「タイム　イズ　マネー」

兼成　雅貴（高26回）

この度、白幡同窓会事務局から原稿のご依頼があり一瞬躊躇しましたが、我々バレーボール部が当時20年ぶりに関東大会出場を決めた経緯を主将だった私としては、26回卒の皆さんに知って頂きたく執筆をお受け致しました。話は非常に長くなりますので、短めにしておきます。

出場を決めた県大会。県北大会一位で勝ち上がってきた水戸の緑岡高校との因縁の試合は（新人戦はフルセットで惜敗）、他校の先生方が良い試合になると予想した通り、まさに激戦。またもシーソーゲーム、そしてフルセットの末の土壇場での大逆転勝利。茨城県のバレーボール史に残る名勝負だったと思います。ご指導いただいた大塚彰吾先生、中根宏先生、本当に有難うございました。

さて私の白幡台の石段を登った3年間の高校生活は、「本当に楽しかった」の一言です。当時、女子生徒は人数が少なく6クラスのうち、EとFの2クラスだけでしたが、私は3年間で、2度もFクラスだったので「本当に楽しかった」の一つの要因になっていることは、まず間違いないと思います。もとい大部分とも言えますね（笑）。

我々26回卒は、仲間意識、

連帯感が非常に強く、同窓会も何度も開催して、当初は4年毎がついには2年毎になり、又開催する予定がコロナにより、ここ4年程開催されておりません。本当に残念至極です。

我々も卒業して早48年が過ぎました。日本が世界に誇る品質の白物家電でさえ経年劣化で傷むように、我々も推して知るべしで、我が同窓生の経年劣化に耐え凌いだ御姿はバリエーション豊富というかバラエティーに富んでいるというか、富んでいる割には全く艶やかさ派手さが無いのですが、シックな味わいを醸し出しております。（地味という表現は削除しました。）

我々はこれからもしぶとく生きていきます。その為にも我が友と定期的に会って酒を酌み交わし、昔話に花を咲かせ、浪川食堂のゴムそば（電気釜で保温している焼きそば）を思いつつ、大いにエネルギーを蓄積したいと思います。ですから、26回卒の皆さん、皆さんは私の宝物ですから健康には十分留意していただき、これからもズーっと永いお付き合いの程、宜しくお願いします。頼みますよ！

また先に天国にめされた恩師の方々、同窓生の方々、これからも生徒達を温かく見守って、そして励まし続けてくださいませ。お願い申し上げます。

白幡台の学び舎で心身ともに育てていただきました。たくさんの思い出を有難うございます。本当に竜ヶ崎一高で良かった。

最後に竜ヶ崎一高の益々のご発展と在校生のご活躍を心よりお祈り申し上げます。

自立への礎

高26回
小坂美恵子

竜ヶ崎一高に入学して直ぐの四月、通学途中、バイクの事故に巻き込まれ、私の代わりに新品の自転車は見るも無残に壊れてしまいました。その際、どなたかが直ぐに学校に連絡を入れてくださっていました。制服の力を感じた出来事として思い出されます。

反省すべき行いも多々思い出されます。私たちの時代には女子だけの家庭科の授業がありました。家庭科は竜二高の先生が教えてくださっていました。本当に先生に対して失礼極まりなかったのですが、私は授業中、よく小説を読んでいました。忘れられないのは、安部公房の『けものたちは故郷をめざす』を読んでいて、指を切断するシーンが余りにもリアルにイメージされてしまい、貧血を起こしてしまったことです。授業の終わりの「起立、礼」の後、椅子に崩れ落ちました。先生に対して無礼で、生意気だった報いです。

楽しい思い出もあります。女子の卓球部を立ち上げたことです。なかなか先生方から了承を得られませんでしたが、何とか人数を集めて女子部が発足しました。当時、男子卓球部は強豪として活躍していましたが、何の文句も不平も言わず、女子に練習場を与えてくださいました。とても感謝しています。S先輩、S君にK君、皆さんとても素敵でした。

進学は、家庭を持っても経済的に自立していたいという思いで、今の時代に例えるならば、売れないお笑い芸人と結婚したとしても金銭的に困らないようにと、薬学部を受験しました。今振り返ると、小さな世界に生きておりました。薬剤師として働くことはありませんでしたが、外資系の製薬会社に就職し、かなり鍛えられました。米国出張では空港からレンタカーで本社に向かうのですが、高速道路の降り口を間違えてしまった際には、肝を冷やしました。今はのんびり特許翻訳の仕事をフリーランスでしています。

子育てや仕事など、ある種の責任からの卒業ともいうべき人生の節目を迎えた今、改めて高校時代の友人達との交友が再開しつつあります。60歳を過ぎてから始めたテニスとランニングも楽しんでいます。今は老後の青春真っ只中です。読書も楽しんでいますが、一度読んだ本を再度購入してしまったりするのはご愛敬です。

身体的衰え、脳の老化、色々あるけれど、まだまだ好奇心も向上心も衰えさせることなく、二度目の青春を楽しみたいものです。

竜一高時代に

高26回
木村　健一

昔のことを振り返ることが多くなってきたこの頃、過去は得てして美化されがちではあるものの、その時代はまさに青の時だったのだろう。あの時の基盤がその後の人生を方向付けた気がする。見わたせばこの時の友人関係が今でも一番濃厚で長い。春の名のごとく「正直な自分」を表出してたからこそ気楽に付き合えるのだろう。

部活動は設立間もないサッカー部に所属していた。現在、千葉県で今をときめくM監督が野球部のコーチとして赴任した時期とも重なる。陸上200mトラックの内側という、フットサル位のグラウンドで蠢いていた。甲子園を目指す部と、県大会出場を夢見る者達では、練習量や厳しさ？においては歴然とした差があるのは言うまでもない。しかし、われらには「やらされ感」が無かった。練習に自分たちの意図を持って臨んでいた気がする。もしかしたら県大会出場以上の夢を追いかけてボールを蹴っていたのかもしれない。

大学受験が目前に迫ってきた三年の秋に、何故かサッカーの竜一高リーグを作ろうという構想が閃いた。盟友S君と共に学年を超えて呼びかけ、5、6チーム位編成され

たのはちょっと驚き。中には全くのシロウトチームその名も「ヨントス」もあり、若いI先生を巻き込んだ試合ぶりには笑いと愉快なヤジが飛び交った。最も苦労したのが試合会場探しだった。無理を承知でMコーチに打診したが、首が縦に振られることはなかった。盟友とともに向かったのが近くの中学校。教頭先生に必死でその趣旨を述べて（何と青臭い言葉が口から出たことだろう）二校の了解を得ることが出来た。試合を重ねるごとに妙に盛り上がり、最終戦は絶対に竜一での思いで、再度Mコーチにアタック。「しゃーねなァ」をもらった。やはり野球部のよく整備されたグラウンドはいいな。さすがでした。楽しむものを自分達で作り上げる歓びを得たことは貴重な財産となった。

一年生チームの優勝で幕は閉じたが、後日談がある。学生時代から社会人になっても我がチームは継続して活動し、やがて竜ケ崎サッカー少年団をつくり、竜ケ崎リーグも開催した。中心となったのがあのヨントスのエース。卓球をやってたはずが、いつの間にかボールを持ち替えていた。その教え子に日本代表がいることにもこちらまで誇らしく思う。

私はと言えば、地方に進学してからは何と山岳部に入部。岩や雪にしがみつき、アンデスやヒマラヤにも足を延ばした。これもあのヨントスの顧問？をしていた藤沢先生と友人達の影響があったのだろう。先生の「明石は山で死んだ。」は名文だった。竜一高時代の出会いが分岐点となり、憧れを夢を少しは実現できた気がします。

そして今に生きる諸君へ。コロナ禍や戦争による世情の変化は、人と人との関わり合いに大きく影響していることだろう。ただ、もしかしたらすでに実践しているのかも知れない、新しい手法での情熱の表現方法を。ちょっと辛い六十余の石段を登りながら、自己表現されることを願ってやまない。

私を形作ったもの

高41回
新名　理子

在学中よりもその後に色々ありすぎて、竜ヶ崎一高時代の想い出、と改めて訊かれるとそれはぼんやりとしていて輪郭をなさないことが多い。

その中から浮かんでくるのは所属していた美術部と勝手に出入りしていた生徒会室。「兼部」といって、活動に支障がないのであれば他の部にも所属してよいという、自由というか生徒の自主性に任せるというか、なんとも素敵な学生生活だった。生徒会は「部」ではないが、そんな空気に甘えて？学業を疎かにしてしまったことを50歳を越えた現在でも猛烈に悔やんでいるが、あの時間は自分にとって基盤になっていると感じられる。

真っ当に美術活動に励んでいる部員もいる一方で、マンガ・アニメに夢中だった私たち。部員である友人が生徒会室に出入りすることがきっかけだったか予餞会という学校行事、3年生を送る会の実行委員の一員となった。オール阪神巨人やウッチャンナンチャンを高校生の分際で招くことができたのも時代のおかげか（いや、生徒会の力量です）。

これらの経験に味を占めた私は、生徒会室に入り浸るようになった。役職に就任することはなく、溜まり場にしているだけの無責任な存在だったが。

卒後は怠惰のしっぺ返しを喰らい、浪人生活を経てようやっと子供の頃からの夢だった獣医師になった。ちょっと興味を抱いていた柔道にも手を出し、様々な年代の方にもお世話になった。途中、飲食業にも関わり、現在では熊本県公務員として働いている。野良猫苦情の相談を受けたり野犬を追いかけたりしながら。食品衛生業務では飲食業の経験が活きていると思う。

好きなことだけをやってきた。いいことばかりでは勿論ないが、自分が「より楽しい」と思えることを自分で決める、周囲の人の力を借りて。

派手なエピソードはないが、日常生活は他愛もない出来事が重なってできていく。そうしたものが今の私に繋がっている気がする。

人生を生き抜く糧

高41回
菊地　一郎

私ごとでございますが、今春、教諭ならびに野球部監督としてお世話になった藤代高を離任し、竜ヶ崎二高に着任いたしました。「白幡台」至近の「竜ヶ峰」で勤務することとなり、自然と、高校時代の出来事やお世話になった先生方のお顔を思い出すことも増えました。

伝統ある竜一高野球部での三年間は、重圧と緊張感に押しつぶされる苦しい毎日でしたが、人生を力強く生き抜くための糧や、一生付き合える仲間、そして生涯の師にめぐり逢うことができました。

「竜一高でよかった。」

教員生活においても、そう感じることが何度あったでしょうか…。四行校歌、六十余の石段、いろは坂、文化祭のフィーリングカップル5×5、浪川商店のチェリオ・ゴムそば・足りないおつり…。同窓生同士なら必ず通じる「竜一あるある」で、どれだけ多くの方々と楽しくコミュニケートできたことでしょう。上司や同僚、高野連関係者など、あちらこちらにいらっしゃる同窓の方々との交流は、私の教員生活の大きな支えになっています。竜一高出身であることは、私の人生における誇りであり、財産であると言っても過言ではありません。

時折、高校野球監督としての指導理念を尋ねられることがあるのですが、私は、こう答えることにしています。

「甲子園なんて簡単に行ける場所ではないし、生徒たちの人間形成の手助けができているのかも分かりません。ただ、彼らが人生を生き抜く糧になる三年間を過ごせる環境を提供してあげたい。それが指導者としての責任だと考えています。」

私自身が竜一高から与えてもらったものを、今の生徒たちにも与えてあげたい…。それが教育者としての私の原点になっています。

末筆ながら、寄稿の機会を与えて下さった編集委員の方々に感謝申し上げますとともに、白幡同窓生各位の益々のご健康とご活躍をご祈念申し上げます。

私の青春の場所

飯田（金ケ江）友子（高56回）

友人を通じて同窓会会報の記事執筆という名誉ある依頼を受け書かせていただきます。

しかし、住所変更を同窓会に申し出ておらず、大変申し訳ないことにしっかり拝読したのはなんと今回が初めてとなりました。

そこで初めて、附属中学ができていたこと、制服が変わっていたことを知って大変驚いたとともに、染谷元校長先生の懐かしいお顔を拝見してうれしくなったり、諸先輩方のご活躍に頭が下がる思いでいっぱいになったり、在籍学生さんの頑張りを拝見し勇気をもらったり…と、気がつくと時を忘れ、何号にも遡って読んでしまったのでした。そして、私自身も一気に20年前にタイムスリップしたような気がしました。

私が竜一生になったのは2000年のことでした。旧茎崎町に住んでいた私にとっては少し遠い場所にありましたが、憧れて猛勉強の末入学したことを今でも覚えています。

入学して少し経ち、高校生活にまだ慣れず不安の中生活していた頃に行われたのが白龍祭でした。まだ中学生気分が抜けきれていなかった私は、その規模や生徒たちの自主性に心を奪われ、先輩たちの後ろをついて回って生徒会活動に参加するようになりました。

そして気がつくと三年生まで生徒会活動に取り組んで青春時代を過ごしたのでした。

生徒会活動で使用していた生徒会室、通称「会室」と呼ばれた校舎の隅にある小さな部屋は私の大切な居場所となりました。生徒会の活動はもちろんのこと、ここにくればいつも誰かが居て、くだらないことを話したり、進路について真剣に相談したり、本当にたくさんの時間をそこで過ごしました。今思い出しても胸が温かくなる、私の青春の場所です。そんな時間を過ごすことができたのは、友人、先生方、家族の支えがあったからだと、大人になった今、改めて思う次第です。

最後に、現在の私自身のことですが、37歳となり4人の子供の育児に追われる日々を過ごしています。自分が竜一生だった頃に描いていた自分になれたかどうかは正直分かりません。しかし、あのかけがえのない時間を共にした友人とは今もなお連絡を取り合い、私の心の大きな支えとなっています。

コロナ禍で開催ができていない同窓会も近年中に開催できることを期待しています。（56回生のみなさま是非来てくださいね。）

最後に、竜一の今後の更なる発展を祈念して終わりとさせていただきます。

ふわふわぼんやりが丁度いい

川崎（石田）佳奈（高56回）

高校時代の思い出はとてもふわふわしている。朝、さっきまで見ていたはずの楽しい夢がはっきり思い出せないのに似ている。それもそのはず、私が竜一生だったのは約20年前。スマホもLINEもなく、二つ折り携帯電話の画面がやっとカラーになった頃のことだ。

入学してまず衝撃を受けたのは、流れで参加した白龍祭スタッフ募集の説明会。中学校の行事とは全く違う自主性や規模に驚いた。そして、それを支える生徒会を中心とした先輩方のキラキラした姿。これぞ漫画で見ていた青春だ！と思った私は、たしかその年のモニュメントとなるモアイ像を作る係に配属された。なぜモアイ像だったのかは全く思い出せないけれど、ワイワイと楽しい時間を過ごしたのはとてもよく覚えている。

部活は硬式テニス部に入り、練習と同じかそれ以上の時間を部室でのおしゃべりに費やした。お腹にゴムを巻いて短くしたジャンパースカートとニットベスト、ルーズソックスでそれなりに女子高生も楽しんだ。帰り道、あの石段で足を踏み外し、数段転がったことは一生忘れられない。今も雨上がりの階段は嫌いだ。

そして、竜一生なら避けては通れない受験勉強。一気に全員のスイッチが入る空気は妙に心地よかった。もともと負けず嫌いで影響を受けやすい私は、すんなりと立派なガリ勉に変身した。あの時あんなに頑張れたのだから、という自信や経験は、社会人になってからも私の支えになっている。

この依頼を受けてから、ふと過去に思いを巡らせる時間が増えた。今でも友人たちとネタにして大笑いするエピソードもあれば、パッと蘇る場面やセリフが、いつの出来事だったか思い出せないままのものもある。でも結局最後は、あ～楽しかったな、で終わる。20年経って、それなりにあったはずの悩みや苦労はぼやけてしまった。早すぎる時の流れは信じたくないけれど、ある意味とても幸せなことだ。

最後に。年末実家へ帰る度、こたつの上からおかえりと言ってくれるこの会報「白幡」。私なんかが…という思いもあるものの、どなたかが懐かしい一瞬を思い出すきっかけになれたら、嬉しい。

地味で凡庸な日々から

高56回
竹尾　浩史（こうじ）

「すみません、やっぱり書けません。」

「何でじゃ？」

「まず、私の高校生活は地味で凡庸で、特に思い出がないんです。」

「よく思い出してみよ。例えば20年前の今日、何をしていたのか。その中に今とちがう何か、諸先輩方と比べられる何かはないのか。かの夏目漱石は日常を…（略）」

「そんなものでしょうか。しかし、まだ何も成し遂げていない私が書いていいものでしょうか？」

「それは残念だが、気にすることはない。誰だって物を語る資格がある。それにまだ30代ではないか。かの伊能忠敬は50歳から…（略）」

「なるほど、そういうことなら…」

謎の博士に促され、私は02年秋に思いを馳せる。私は牛久から自転車で平坦な道を進み、下って上ってまた下り、最後に上る。大きな針葉樹の木々の間に新築の校舎が見え、端にある駐輪場に向かう。2年A組、理系の男子クラスは行き止まりにあり、誰も前を通らない。休み時間は話をしたり、早弁をしたり、ドカベンを読んだり。授業が終われば校外のテニスコートに向かい、ほどなくナイターの光の中で硬式テニスに興じる。それが終われば隣のドラッグストアで菓子パンなどを買って食べ、暗い夜道を牛久組で隊列を組んで帰る。そんな毎日だった。

当時、木村先生が「授業より先のところを勉強してもいいんだぞ」と言ってくださり、私は数学の参考書『黄色チャート』をめくり進めた。時には部活をサボって飛龍館で続きをしたことも、この頃の思い出。

その後私は東京大学薬学部に進んで博士号を取り、今は弱小企業ながら鎮痛薬の研究開発に取り組んでいる。数年前には念願のアメリカ留学もさせてもらった。言葉の分からないストレス、目の治療のため緊急帰国など、ままならない日々だったが、研究もそれ以外も多くの気付きがあって今に生かされている。

竜一のことを思うと、少し背筋を伸ばして、今日も私は自転車に乗って仕事に向かっている。

あの頃

高66回
諸橋　美月

「白幡」の執筆依頼をいただいてから高校時代の思い出を振り返ったところ、卒業してから8年経ったことに驚くと同時に、今でも最近のことのように高校時代の様々なことが蘇りました。

私たちの学年は入学前に震災があり、今までの生活が一変しました。3年間歩かずに自転車で校門までの坂道を登り切るという目標を密かに立て、楽しみにしていた高校生活でしたが、今後どうなってしまうのか、無事に入学式ができるのか不安だったのを覚えています。

期待と不安が入り交じる中始まった高校生活ですが、竜ヶ崎一高で一生付き合える友人と出会い、楽しく、充実した3年間を過ごすことができました。文化祭でジェットコースターを作り上げたこと、かわいいクラスTシャツを作ったこと、チャイムと同時にダッシュでパンを買いに行ったこと…そしてふざけて怒られたこともありましたが、全ていい思い出です。

また、受験期には友人と切磋琢磨し合いながら、土日はもちろん年末年始も飛龍館に篭っていました。当時は辛かったですが、それも竜ヶ崎一高ならではの思い出だなと思います。そして卒業後は医療系の大学へ進学し、作業療法士として現在は在宅医療のリハビリに携わっています。友人の存在なしではきっと途中で諦めてしまい、この道に進むことはできてなかったと思います。

振り返ると本当に充実した3年間を過ごすことができていたんだなと実感します。今でも高校時代の友人と会うと思い出話に花が咲き、各方面で活躍している友人の話を聞くと自分も意欲が掻き立てられます。現役時代はもちろん、卒業後も友人には刺激され、励まされてばかりです。竜ヶ崎一高での出会いに感謝です。

今の自分を支えてくれる日々

高66回
秋葉　大吾

「人生にスコアボードはない」

この言葉は、当時私たちの指導をしてくださっていた監督さんが、最後のミーティングで残してくださった言葉の中の一つです。どれだけ努力したとしても、頑張っていたとしても、それが得点に結びつかなければ、相手に勝つことはできない。その過程を経て、結果に結びつけ、相手を上回ったものが勝つことができる、それは野球のみに限らず、どの世界に行っても当てはまる条理だと、当時を振り返って今でも、そう思うことができます。ただ、ひたすらに結果が求められるこの世の中で生きていくことは、非常に残酷だ。スコアボードに残らないような努力や頑張りなどでは評価もされず、勝つことはできない。ですが、監督さんが残してくださったこの

言葉によって、私は努力することや頑張ることの大切さに改めて気づかされました。結果に結びつかなかったとしても、その努力をしている姿を見てくれている人は、必ずいる。その努力を正しい方向に導いてくれる人もきっと現れる。だから、そんな人との出会いや、自分の努力を信じて、これから先も頑張っていきたいと思うことができました。

私は今、小学校の教師として、たくさんの愛おしい子どもたちと接しています。結果が求められる時代だからこそ、子どもたちをいかに導き、価値づけ、その過程や努力、子どもたちの願いを認めることを、これからも大切にしていきたい。子どもたちが、それぞれの地でいきいきと輝く未来に資することができる教師になれるよう、励んでいきたい。

竜ヶ崎一高で出会った仲間、先生方、そして硬式野球部の仲間たちとの日々の尊さは、日ごとに増すばかりです。出会いに感謝し、私にたくさんのことを与えてくださった方々に恩返しとして、少しでも多くのものを与えられる人になれるよう生きていきます。

勉強と部活漬けの日々を思い返して

高66回
島田（竹山）優花

私の高校生活は、勉強と部活動の両立、文武両道を目指した3年間でした。念願だったバドミントン部での活動に全力投球するため、限られた時間でいかに効率よく勉強ができるか、ということを密かに追求していました。先生からの愛の鞭である、大量の課題のおかげで、最後まで部活をやり遂げながらも志望校に合格することができたと思っています。先生方には授業外でも過去問添削や面接練習までしていただき、感謝しかありません。

バドミントン部では、最後の一年を部長に任命いただきました。当時はとても張り切って、私なりに一生懸命仕切っていたと思うのですが、振り返ると力不足だった場面ばかりが思い出されます。同期全員退部の危機か!?と思うような時期もありましたが、それでも最後の団体戦で、全員で応援し合い、一緒に戦えたことは本当によかったです。他の部員も同じように思っていただけていたらいいのですが……。卒業後はなんだか疎遠になってしまいましたが、コロナ禍が明けた際には対面で同窓会ができたらいいなと思っています。

そんな高校生活を経て現在は、中高生を対象とした理数系人材育成を推進する事業の支援・推進に携わる仕事をしています。竜一高も指定されている『スーパーサイエンスハイスクール』も支援事業の一つです。中高生を対象とした事業ということもあり、仕事の一環で竜一高の生徒の活躍を目にしたり、竜一高の先生が同じ部署に出向でいらっしゃって一緒にお仕事したりなど、社会に出てからも度々母校と関わる機会があって大変嬉しく思います。今後も後輩たちの力になれるような仕事をしていきたいと思っています。

末筆ながら、皆様方の一層のご発展とご活躍を祈念いたしまして、結びとさせていただきます。

母校と私の人生

私の原点

高32回
大古　輝夫

竜一高在学当時の私は、人前で話すことが苦手で、目立つことを避ける生徒であった。そんな私でも、友人には恵まれ「志の高い友人」から刺激を受け、将来のことを真剣に考えるようになった。当時、兄が高校の先生をしている姿を見て、自分も学校の先生になりたいという漠然とした思いはあった。しかし、そのことを誰かに話したことはなかった。

二年生の時だったと記憶している。休み時間に友人が、「自分は将来学校の先生になろうと思う。大古は何になろうと思っているのか」と聞いてきた。その質問に、「社会科の先生になろうと思う」と答えた。間髪入れずの即答に自分でも驚いた。自分の将来について初めて人に話した。

しかし、このような強い思いをもつようになったのには理由があった。ある授業で、指定された問題について、翌週に解説をするという課題が与えられた。十分に準備をしたつもりであったが、緊張からか途中で説明が止まってしまった。続きを誰かが説明していたが耳には入らなかった。自分の不甲斐なさに落ち込んだ。

休み時間になっても気分が晴れず、廊下で俯いていた。そこに社会科の長南章先生が通りかかり、「百万塔陀羅尼経の虫干しをするので、手伝ってほしい」と声をかけてくださった。（ご存じの方も多いとは思うが、竜一高は、この世界最古の木版印刷物を所蔵している。）どうして私に声をかけてくださったのだろうと思いながらも、陀羅尼経を見ることができる機会に心が沸き立った。

先ほどまでの気持ちが少し晴れ、社会科準備室に向かった。首を傾けたように曲がった木造の塔の中から陀羅尼経を取り出して広げた。陀羅尼経について質問すると、「いつもの元気が戻ったようだな」と笑顔でおっしゃった。先生は元気のない私を心配して声をかけてくださったのだ。先生のような、生徒の気持ちのわかる先生になりたいと思っ

た。

先生や友人とは、県内の寺社を巡り石碑の拓本を採ったり、ニュータウン造成地で縄文土器のかけらや黒曜石の矢じりを探したりした。そのことは、社会科の先生になるという思いをさらに強くした。

先生になってしばらくして、将来について話し合った友人と再会した。先生になる夢を叶えたことを共に喜んだ。そして、お互いを励まし合った。

過日、担任をしてくださった齋藤佳郎先生が来訪された。齋藤先生には、在職中もご指導、ご支援をいただく機会に恵まれた。先生の気遣いが心に染みた。振り返ると、竜一高の先生方のようにはなれなかったが、先生方の優しさや温かさを忘れることはなかった。

通勤で竜一高下を通る。信号待ちをしている生徒を見ると親近感を覚える。名前も知らない後輩ではあるが、充実した高校生活であることを願う。現在勤務する龍ケ崎市教育委員会の執務室からは、竜一高の校舎がよく見える。そこには、竜一高でご指導いただいた先生方の姿が重なる。「私の原点」がそこにある。

（龍ケ崎市教育長）

ものづくり

高40回
鴻野　弘好

卒業して35年が経ちました。竜一在学時代、少年時代の記憶を思い出し、現在の仕事や未来について書いていきたいと思います。

私は、河内町で生まれ育ちました。

自転車で約1時間、向かい風の中を必死にペダルをこいで通学しました。部活は軟式野球部で3年間、久保田先生、張替先生には大変お世話になりました。

小学生の頃から憧れていた龍ケ崎という豊かな街の高校に入学した私にとって、その先の目標を見つける事は難しい課題であり「なんの為に学ぶのか」その目的意識も無いまま大学受験に臨んでいたことを思い出します。

その河内町の実家は、金属加工の町工場でしたが、さまざまな状況や時代背景からコスト高の国内生産部品は海外生産に移ってしまい残念ながら事業継続を断念することになります。

その後、金属加工の工場を再活用し価格競争等に左右されることの無い付加価値の高い「ものづくり」を志し、1998年河内町で革製品のブランドを立ち上げることになります。

私達は、実際に製品を作り出す場所を「アトリエ」と呼んでいます。ファンの方々からのご要望に応えること、そして作り手からの発信を目指し、「ものづくり」の現場を直接見て頂く見学会を開催しています。2015年には、ヨーロッパのメゾンブランドに引けを取らないアトリエも完成し、今では全国からこの地を目指して見学に来られるようになっています。

見学会では竜ヶ崎駅からアトリエまで自社のワーゲンバスにて送迎しています。田舎育ちの私からすると田園のなんてことない景色ですが、お客様が喜ぶ姿に産業観光としての潜在的価値を感じています。

少し前になりますが河内町の中学生数名がアトリエ見学に来てくれた事があります。60代のボランティアスタッフが案内を担当してくれたのですが、孫世代の中学生達の質問はアトリエの事から、自分達が生活している地域の活性化や大切な資源を守って行くにはどうすべきかに広がっていったそうです。

地元にある会社の見学を通して、未来を担う若者が、真剣に地域のこれからを考えてくれたことに私自身も嬉しく思いました。

一高の在校生が地元龍ケ崎市の政策アイデアコンテストや、竜鉄のイベント事業等でのご活躍の内容を拝読したり人づてに聞いたりしております。地道な事の繰り返しこそ、何かを成し遂げる為に必要なプロセスだと思います。これからも是非発展させていってください。

未来へ、地域の地道なアクションから何を見いだすことができるのか？

その問の答の一つに、2020年からアトリエを拠点にして茨城県の「ものづくり」を応援するプロジェクトをスタートしました。河内町の酒米を使ったオリジナルの日本酒をはじめ様々な商品の企画と販売に取り組んでいます。

そこで見えてきた新たな課題を克服し、さらに進化させる為に2023年からWeb百貨店をスタートすることにしました。

茨城は、全国的に見てさまざまな資源が豊富でありこの魅力を最大限引き出すことができれば世界で勝負することができると考えたからです。私達のブランドが成長し信頼されることと、地域が活性化され希望ある未来を描けることを一体のものとして取り組んでいきたいと考えています。

（WILDSWANS代表）

トピック①

育成功労賞
持丸監督にインタビュー

令和4年10月3日、前日の第75回秋季千葉県高等学校野球大会決勝戦で、見事優勝を飾った持丸監督からお話を伺う機会を持つことができました。待ち合わせ場所の藤代駅前「鈴木屋」に入ると、すでに持丸監督はいつもの笑顔で染谷同窓会長と談笑をされていました。

今回のインタビューは会報編集委員の2名が担当しました。ちなみに、「鈴木屋」のご主人は、染谷同窓会長と同期の同窓生（高15）で、お孫さん（高66）も野球部で頑張った同窓生です。

今回、持丸監督からお話を

伺うのは、持丸監督が、日本高校野球連盟と朝日新聞社が表彰する「育成功労賞」に選ばれたことが直接のきっかけでした。持丸監督が監督として就任した4校すべてを甲子園に導いたことは同窓生の皆様もご存じだと思います。

育成功労賞は、遅きに失したという感もあります。また、一昨年には、『信じる力』を上梓し、この本については本同窓会報（第32号）においても紹介しています。せっかくの機会なので、『信じる力』を同窓生にプレゼントしようという企画が持ち上がり、そのためのインタビューをすることになりました。本には、本人直筆のサインをいただいていますので、ぜひご応募ください。

秋季千葉大会で優勝
翌日の鈴木屋にて

持丸監督　独特の語り口

前日まで試合が続いていたので、お疲れであろうと気を遣う必要がないほど、お元気で、いつもの語り口で監督としての考え方、教育に関する思い等々を伺いました。いつもの語り口といっても、千葉県代表ともなると、なるべく標準語を使うよう心がけていると冗談交じりにおっしゃっていましたので、標準語に直して、以下ご紹介します。

「竜一でよかったと思う。どこに行ってもわかってもらえますから。それから、俺は周りの人に恵まれていましたよ。先輩はかわいがってくれるし。同じ考え方だからというわけではないです。全然考え方が違ってもかわいがってもらえたよ。」かわいがってくれた先輩としては、特に、現在同窓会顧問の野口武太郎先生、同じく齋藤佳郎先生のお話をしてくださいました。野口先生との交流については、染谷同窓会長もご存じで、持丸監督が野口先生を訪ねていくと大喜びしてくれるというのです。齋藤先生との関係については、『信じる力』の中でも触れられており、是非、本を手に取っていただきたい。持丸監督が、人と人とのつながりを非常に大切にしてこられたことがわかるエピソードでした。

「別に俺が書こうと思ったわけではないのです。行った学校全てを甲子園に出したということで、俺に話が来たのですけど、最初は、行った学校全部を甲子園に出したのは、俺だけではなく、もう一人いるから、俺が書くことないだろうって言ったのです。それでも頼むというので、話をいろいろ聞いてもらって、本ができたのです。」「生徒を集めて強いチームを作って甲子園に出る、そういうのもありだけど、地元の子どもたちで頑張って甲子園に出る。高校野球の原点はそこにあると考えている。それを子どもたちにわかって欲しいし、子どもたちの指導者にもわかって欲しかった。」執筆の動機や読者としてどのような人を想定していたかという点についてのお答えです。

「甲子園に連れて行ったとか導いたなんて言われるが、俺が連れて行ったわけではないですよ。生徒らが頑張って連れて行ってくれたのです。」この言葉と同趣旨のことは、メディアでも報じられていますし、本の中でも触れられています。

平成2年茨城大会で優勝
胴上げされる持丸監督

「結果が出なければダメだって考え方、それもありです。でも、その過程、プロセスが何より大事なのです。ただ、どこかで成功させないと。成功体験によって失敗が生きることになります。」勝負である以上、勝ちという結果を求めて努力することになりますが、その努力の過程が重要ということがわかります。

「俺は、野球、好きじゃなかったんだ。もちろん、草原で友だちと球を投げて打って走ってという野球は楽しくて好きだった。でも、中学・高校と進んで野球を続けたら、そういう野球は好きじゃなかったんです。」この言葉を受けて、なぜ竜一の野球部の面倒を見るようになったかを伺うと、「大学で野球をやって、卒業したら琉球新聞に行きたかった。そこでノンプロをやって、その後はブンヤになりたかった。ところが、竜一の野球部を見てくれっていう話が来たものだから、竜一に来てコーチをやることになって、琉球新聞には行けなくなった。」とのことでした。

「若いころはできなかったかも知れないけど、受け入れることって大事ですよね。避ける、拒絶するのではなく、ああ、そういうこともあるのかと一旦受け入れること、これが大事だよね。こういうことができるようになったのは、年を取ってからですね。」指導の方法が若い頃と変わってきて、ご自身の考え方、心境などの変化なども語ってくださいました。

「友だちを自慢できること、教え子を自慢できること、そういう学校を作りたいな。」染谷同窓会長が、持丸監督のお話を聞いている中で、何度か「やっぱり、教員なんだよな。」とおっしゃいましたが、望ましい学校のあり方をお話ししてくださった中の言葉です。

まだまだ楽しく、ためになるお話を伺いましたが、オフレコの指示も幾度かあり、今回はここまでに留めておきます。持丸監督、ありがとうございました。

持丸監督を直接ご存じの方、勝利監督インタビューの印象を強くお持ちの方には、「こんな話し方しねえだろう」と違和感を抱かれたかも知れませんが、持丸監督が、少しだけ標準語を使おうと努力なさっていることに免じて、ご容赦ください。

（文責　有川・霜村）

◎持丸監督の『信じる力』（本人サイン入り）を抽選で3名の同窓生の方にプレゼントします。応募方法については、15ページをご参照ください。

トピック②

彼の地に導かれて 20年あまり

松浦　範子（高34回）

雪山や早朝の空気に触れる時、ふと「クルディスタン（＝クルド人の―土地）」の匂いを感じて懐かしくなることがある。

私は一九九七年から二〇年あまりトルコ、イラン、イラク、シリアを中心に、レバノンやジョージアなどを訪れ〈国を持たない民族では世界最大〉とされるクルド民族の取材と撮影を繰り返してきた。三、四〇歳代にかけては特に、行き先は常にクルディスタンであり、「クルドをやる」という一時期を無我夢中で過ごした。

クルド人が暮らす土地は中東の複数の国境にまたがる。隣接する国で戦争が起きれば巻き込まれ、国内では独自の文化を奪われて熾烈な弾圧にもさらされてきた。抵抗した一部のクルド人が山間部でゲリラ戦を展開すると、賛同した男女が次々と追随し、勢力を増したクルド反政府武装グループと政府軍との泥沼の闘いは長きに渡り続いた。

私が撮影の旅を始めたのは、そんなトルコの南東部だった。随所に敷かれた検問所や町中で何度も軍・警察に足止めされ「外国人がこんな所に何をしに来た」と詰問される毎日。カメラやたくさんのフィルムを持ち一人旅をする私は、軍の基地や警察署の奥へ連れて行かれ、繰り返される長い尋問に一晩留め置かれた挙句、軍の上官に「お前は日本の新聞にトルコの悪口を書くために来たんだろう！」と銃を突きつけられたこともあった。クルディスタンの旅は軍や警察との闘いでもあった。

その一方で町や村の住民たちからは頻繁にこう声をかけられた。「クルディスタンへようこそ。ここはトルコじゃない、クルディスタン。私たちはトルコ人じゃない、クルド人なんだ」。そして「私たちのこと、ここで戦争があったことを、あなたの国の新聞に書いて」と。

SNSなどなかった当時、彼らにあったのは命懸けで発行する地下新聞くらいだった。私に気を許した人たちは、その土地で起きたこと、自らの身や身近に起きたことを堰を切ったように話した。クルド人だからという理由だけで蔑まれ、酷い暴力を受けてきたことを。「私たちだって同じ人間なのに。でもここでは家畜以下の扱いしか受けられない」。だからただただ伝えてほしいのだと。

私の話す言葉は拙く、どれほど頼り無げであったろう。それでも彼らはどこからともなく現れた私を全力で支え、取材相手の仲介を買って出、食事や宿までも提供してくれた。

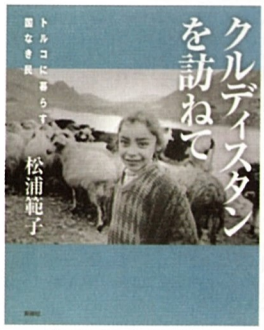
不条理、怒り、恐怖、悲しい出来事は、折り合いのつかないまま胸の奥に沁み込み痕跡となる。この世は腐敗し、過ちに満ち、不確かで不公平だ。それでも私が会ったたくさんのクルド人たちは夢を見ていたし、冗談を言っては笑い転げた。そんな彼ら彼女らに導かれるように私のテーマは「《クルド》を撮ること」と固まっていった。それには彼らと向き合い、その声に真剣に耳を傾けなければならない。覚悟が必要だった。躍起になっていた私の姿は日本の友人知人たちの目には滑稽に映っていただろう。けれど私は大真面目だった。

現地で過ごした日は七百日を超え、イラク戦争直前に上梓された書籍は多くのメディアで取り上げられた。以来、新聞・雑誌に書いたり、各地で講演や写真展をすることが私の仕事の中心となった。無理がたたり目が見えなくなって緊急入院したこともあった。イスラム国の台頭やシリア内戦は現地入りを阻んだ。そして今度はコロナである。

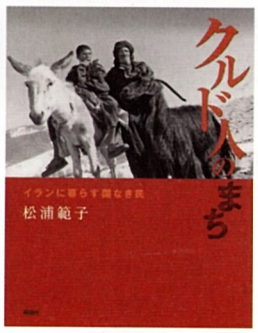
先日、母校の前を通りかかり石段の下から高校時代を思った。私は脳天気で勉強もろくにしないふざけた生徒だった。遠く離れた紛争の地で歯を食いしばってきたのも、あの頃のただの馬鹿のままでは終われない気がしていたのかなと、少し思った。現在はもっぱら商業的な撮影にかかりきりだが、状況が落ち着いたらまた彼の地を訪れようと思う。

（写真家）

2001年3月撮影　ディヤルバクル（トルコ）



2003年3月刊行



2009年1月刊行

白幡同窓会ホームページもご覧ください

● 記事のご紹介

OB・OGの皆様の高校時代の思い出やエピソードが綴られています。

同窓会会報のバックナンバーがご覧いただけます。

多感な青春時代をこの白幡台で過ごし、やがて優れた芸術家として飛躍された方々、あるいは竜ヶ崎一高に深く関わられた芸術家の方々の事蹟を紹介しています。

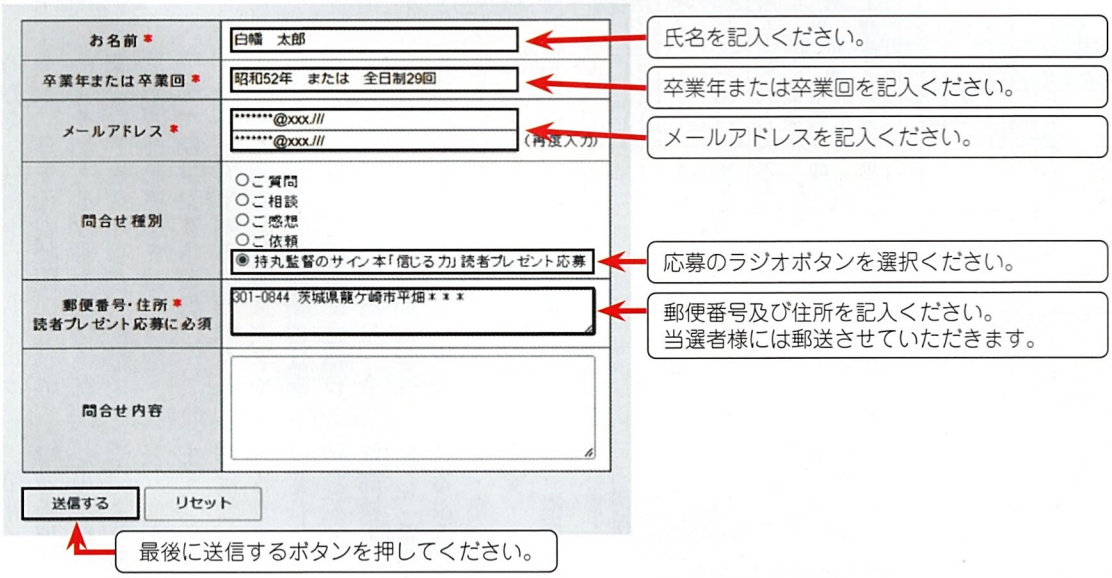
あの暑い夏の時を思い出す。そして今も人生の応援歌として心に残る詩です。応援団による動画もご覧いただけます。

近々のニュースです。トップページの見出しからリンクしています。

2020年、竜一高は創立120周年を迎えました。記念式典の様子、学校の沿革などが応援サイトからご覧いただけます。（画像をクリックください）

● 持丸監督のサイン本「信じる力」読者プレゼント応募要領

ホームページの「お問い合わせ」から下記太線の欄に必要事項を記入・選択の上、「送信する」ボタンを押してください。同窓会のメールアドレス　shirahatadousoukai@gmai.com　に送信されます。「お問い合わせ」は下の QR コードからも直接アクセスできます。



白幡同窓会ホームページを覗いてみよう！

URL：http://www.shirahata.sakura.ne.jp

ホームページ運営委員会

トップページ　お問い合わせ

進路状況

○全体概況

共通テスト『数学ショック』

コロナ禍の影響を受けた大学入試も22年度入試で3回目となった。今回の入試では、2年目を迎えた『大学入学共通テスト』で平均点が大幅にダウンしたことが注目を集めた。30科目中7科目で過去最低点を記録したが、特に数学の平均点が40点前後と大きく下がった。このような場合、共通テストを利用する入試では志願者の減少や安全志向が強く反映された出願になりがちだが、22年度入試ではその影響は小さく、国公立前期試験の志願者は前年並み、中期・後期日程では増加した程度だった。志望校を変えず、そのまま出願する『初志貫徹』の受験生が多かったことも特徴の一つとして挙げられる。私立大学の共通テスト利用も前年並みの出願者数となった。

また、22年度入試では競争緩和がより一層進んだと言うことができる。受験人口の減少により大学志願者数も減少を続けている。また、大学志願者に占める現役高校生の割合は若干の増加傾向にあるが、一方で既卒生の割合は年々減少し、その結果、現役高校生中心の入試へと変化している。

22年度入試では平均点が大きく下がったため、23年度入試ではその反動で平均点がアップするのでは？易しくなるのでは？と安易に考えることは避けた方が良いだろう。「高等学校教育の成果として身に付けた、大学教育の基礎力となる知識・技能や思考力、判断力、表現力等を問う問題作成」が示されていることから、22年度入試の問題傾向は続くと考えられる。

○厳しい入試結果

共通テストの全国平均点は、理系科目を中心に難化した結果、前年の文系555点、理系571点から、それぞれ507点、510点へと大幅ダウンし、今までで一番低い平均点であった。竜ヶ崎一高生も例外ではなく、文系506点（前年比55点減）、理系510点（同61点減）と大きく下がった。

その結果、多くの生徒が試験終了後には出願先の変更を検討し始めるなど焦りの様子が見られ、試験直後から学年の先生方を中心に面談が繰り返し行われた。全国平均点の速報や自己採点の集計結果から、全国の受験生も同様の状況であることや、出願予定者の中での位置が分かるにつれ、特に個別試験の配点比率が高い国公立大学を中心に出願大学を変えずにチャレンジする姿勢が見られた。また、担任の先生や教科担当の先生方と面談を重ね、納得できる大学への出願を決めた生徒も多くいた。

合格実績は別表にある通りであり、学校全体で厳しい結果を真摯に受け止めなければならないだろう。これまで竜ヶ崎一高の進路指導において指針となってきた『Rプログラム』に照らし合わせ、学習指導や進路指導だけでなく、それらを支えるさまざまな指導、さらには教員の入れ替わりが多い状況で、『Rプログラム』が生徒の状況に応じて改変を加えながらも適切に踏襲されてきたかなど、検証する必要性を痛感させられた。

○チャレンジする姿勢

その一方で明るい傾向もある。最難関である東京大学や京都大学などへの受験者は継続して存在し、確実に合格ラインには近づきつつあり、令和4年度入試では京都大学への現役合格を果たした。本校としては、このまま受験生をコンスタントに繋げていき、合格へのノウハウを獲得していくことがこの壁を突破する第一歩と考えられる。

○竜一の新しい時代へ

令和4年度入学生より、新学習指導要領が実施され、また竜ヶ崎一高は令和5年度入学生より単位制へ移行するなど、大きく変わろうとしています。それでも、生徒の力を伸ばし、社会で活躍し貢献できる人材を育成していく姿勢は変わりません。高い目標を持ち続ける竜一生が、充実した高校生活を通して大きく成長し、希望する進路を実現できるよう、より一層手厚い支援・指導を目指したいと思います。

進路指導部・井川　裕司

令和４年３月 進路状況一覧

◆国立大学合格者数

大学名	現役	過年	合計
帯広畜産大	2	1	3
北見工大	1		1
室蘭工業大	1		1
東北大	5	1	6
山形大	3		3
福島大	1		1
茨城大	33	4	37
筑波大	7	2	9
群馬大	1		1
埼玉大	4		4
千葉大	4		4
東京工業大	1	1	2
東京海洋大	1		1
お茶の水女子大	1		1
信州大		3	3
京都大	1		1
鳥取大	1		1
高知大	1		1
長崎大	2		2
宮崎大	1		1
琉球大	1		1
合計	72	12	84

◆公立大学合格者数

大学名	現役	過年	合計
秋田県立大	1		1
茨城県立医療大	3		3
前橋工科大	1		1
高崎経済大	2		2
群馬県立県民健康科学大	1		1
東京都立大	6		6
石川県立大	1		1
合計	15	0	15
国公立大　合計	87	12	99

◆主要私立大学合格者数

大学名	現役	過年	合計
慶応義塾大		3	3
早稲田大	9	2	11
東京理科大	20	5	25
学習院大	6		6
明治大	10	4	14
青山学院大	4	4	8
立教大	8	1	9
中央大	17	3	20
法政大	21	8	29
国際基督教大	1		1
成蹊大	6	3	9
成城大	2		2
日本大	48	7	55
東洋大	34	2	36
駒澤大	22	1	23
専修大	13		13
千葉工大	72	18	90
獨協大	22	2	24
武蔵野大	22		22
芝浦工大	17	7	24
東京電機大	16	7	23
東京農業大	14	1	15
大東文化大	10		10
東海大	9	4	13
国学院大	8		8
跡見学園女子大	8		8
文教大	7	1	8
共立女子大	7		7
目白大	6		6
東邦大	6		6
大正大	6		6
順天堂大	6		6
国士舘大	6		6
北里大	5	1	6
帝京大	5	1	6
昭和女子大	3		3
日本女子大	2		2
その他	204	13	217
合計	682	98	780

◆大学校合格者数

大学校名	現役	過年	合計
防衛医科大学校			
国立看護大学校	2		2
防衛大学校	2		2
水産大学校	1		1
航空保安大学校			
職業開発総合大学校	1		1
合計	6	0	6

附属中学校

3回生が入学し、やっと3学年が揃いました。3年生は1学年上の上級生がいない中で自ら附属中生活を切り開いてきたためか、風格さえ感じさせます。2年生は上級生から学んだことをもとに1年生をサポートし、急に大人になった感じを受けます。1年生は、昨年度までの附属中生の活躍に憧れを抱いて入学してきた生徒も多いようで、毎日が楽しくて仕方がないという様子がうかがわれます。今度は、自分たちが憧れられる番だと自覚して、学校生活を送ってくれることを期待しています。

3学年が揃い、これまで以上に活気ある附属中となりました。白龍祭のクラス企画にも参加し、授業だけでなく行事の面でも6年一貫教育の形ができつつあります。

地域課題解決

昨年度から力を入れている、龍ケ崎市の町おこしをねらいとした課題解決学習。今年度も学年の枠を超えて精力的に活動しています。7月には、3年ぶりに開催された「撞舞」について探究しているグループがSNSで情報発信しました。撞舞当日にはYouTubeでライブ配信し、多くの方から高評価をいただきました。

また、昨年度に続き商店街を訪問し、各グループが龍ケ崎市活性化の方法を探究しています。各グループの企画の中で、代表の6グループが、高校生を対象とした県の事業であるIBARAKIドリームパスに応募しています。

このような附属中の取り組みが読売新聞茨城版や茨城新聞で取り上げられました。

龍ケ崎市広島派遣

龍ケ崎市では平和推進事業として市内の中学生を広島市に派遣しています。関係の方々のご尽力により、今年度から、本校からも3年生2名が派遣されることとなりました。

生徒達は、龍ケ崎市での3回の事前学習会を経て広島に向かいました。広島では平和記念式典に参加したり、大和ミュージアムを見学したりするなど、8月5日から7日まで、戦争と平和について考える機会を得ることができました。この後は広島での経験を踏まえて報告会を行う予定です。

事前学習や広島での学習の様子は、龍ケ崎市のホームページをご覧ください。

校外での活躍

龍ケ崎市総合体育大会

○軟式野球　準優勝

○ソフトテニス

個人　吉住・武蔵…6位

○柔道

戸丸……優勝

藤田……2位

向吉……ベスト8

○剣道　団体　優勝

個人　岩渕…準優勝

新木……3位

県南総合体育大会

○柔道

藤田……3位

戸丸……3位

○水泳

800M自由形

二ノ宮…2位

100Mバタフライ

髙橋……3位

200Mバタフライ

髙橋……2位

200M・400M自由形

亀岡……8位

全国小中学生ライフル射撃競技大会

ビームピストル男子

浅野……優勝

河村…準優勝

国土交通省主催「全日本中学生水の作文コンクール」

園田…茨城県優秀賞

WRO Japan 北関東

谷川・宮本…2位

（附属中教頭　内川　美佳）

部活動の主な成績
（令和4年4月～9月）

☆関東大会以上
◎県大会（関東県予選・県総体）

運動部

硬式野球部
◎春季県大会……ベスト16
◎第104回茨城県大会
……ベスト8
◎秋季県大会……ベスト16

陸上競技部
◎県高校新人大会
男子百十Mハードル
……相澤6位

射撃部
☆関東大会
男子団体……出場
男子個人……出場
女子個人……出場
☆全国大会
男子団体……出場
男子個人……出場

男子ソフトテニス部
☆関東大会
個人…白井・相崎ペア出場
◎関東県予選
団体……ベスト8

女子ソフトテニス部
☆関東大会
個人…酒井・福島ペア出場
◎関東県予選
団体……第3位

軟式野球部
◎春季県大会……ベスト8
◎夏季県大会……ベスト8

弓道部
◎関東県予選
女子団体……第3位
☆関東大会
女子団体……優勝

文化部

吹奏楽部
☆東関東吹奏楽コンクール
高校B部門……金賞
◎県吹奏楽コンクール
高校B部門…金賞・朝日賞

書道部
☆高校生国際美術展
チャールズ皇太子賞…安藤
☆比叡山競書大会
伝教大師賞……山下
☆安芸全国書展高校生大会
南不乗賞……髙野

棋道部
◎県総文祭
個人戦C級優勝……林

小笠原探究ツアーを終えて

白幡同窓会をはじめとして多くの方々にご支援いただき、中学生4名、高校生12名の計16名が参加した小笠原探究ツアーを無事終えることができました。24時間の船旅で初めて見たボニンブルーの海に感激し、見るもの全てが目新しかった6日間でした。人の生活を維持しつつ、人為的な影響を抑えて自然を守っていこうとする島の方々から多くのことを学ぶことができました。（文責：片岡亜矢子）

ウミガメの甲羅を磨いている様子

南島の扇池をバックに撮影した集合写真

令和4年度定通大会

「秋季大会でまた戦おう」この言葉は、今年度、あと一歩で惜しくも全国大会出場を逃したバドミントン大会において、勝者である土浦一高定時制生徒と本校定時制生徒が健闘を称え、互いの選手が語ったものである。新型コロナウイルス感染症の収束は見通しが立たない中ではあったが、感染予防や感染拡大防止に十分配慮した上で、全国高等学校定時制通信制大会予選である令和4年度茨城県高等学校定時制通信制体育大会が、県立水戸南高等学校を主会場として、昨年度に引き続き無観客、関係者のみに限定した形で開催された。今年度、本校からはバドミントン、ソフトテニス、男子バスケットボールと久しぶりの複数種目のエントリーで大会に臨んだ。

大会当日－6月12日（日）午前7時定刻通りに主会場である水戸南高等学校へ向けて出発。主会場到着後、バスケットボールは隣接の水城高等学校体育館、バドミントン、ソフトテニスは水戸南高校内の競技会場へと移動し大会開始を待った。この大会に向け、生徒たちは、少ない練習時間の中でも最大限の成果が上がるよう創意工夫を施すなど熱心な先生方とともに一生懸命に練習に取り組んできた。この真剣で清々しい気持ちは、各競技の試合内容にも反映され、どの競技においても例年以上に白熱した素晴らしい展開であった。

結果は、飯塚春斗（4年）・藤谷ライアン（4年）のバドミントン男子ダブルスが第3位、小泉尚人（3年）がバドミントン男子シングルスで第3位と大健闘した。今回の定通大会では、生徒たちの一回り大きな成長を感じさせ、生徒のもつ可能性は無限であると大いに感じさせるものであった。

定時制教頭　髙野　光章（高40回）

寄贈資料

この度、竜一高に関係する貴重な資料が同窓生の瀧澤伸幸様（高33回）から提供されました。

昭和29年（1954年）3月発行の生徒会誌第6号と昭和55年（1980年）9月発行の第3回白龍祭パンフレットです。

生徒会誌「白幡」の表紙は服部正一郎先生、題字は秋山海堂先生です。同窓会報の題字も秋山先生です。内容は、生徒の文芸作品を中心に各部活動の報告等が掲載されています。職員校務分掌一覧のほかに、第6回全日制卒業生及び第2回定時制卒業生の名簿もあります。生徒会会計報告もありますが、発行主体は、生徒会ではなく「文芸部」になっているところが興味深いです。

第3回白龍祭は創立80周年の記念式典を迎える直前の文化祭ということもあり、しっかりとした装丁のパンフレットになっています。

今回寄贈されたパンフレットは、瀧澤様ご自身が3年生の時のもので、生徒会誌は高6回卒のお父様の遺品の一つということでした。ありがとうございました。

記念品紹介

この度、龍ヶ崎観音ご住職で同窓生の秋田光祥様（高20回）から自宅で保管している竜一高に関係する記念品についてご連絡があり、お伺いすることになりました。

その記念品は盃で、内側には、「創立十年建設附属図書館開館式記念」、中央には、龍ケ崎中学校校章、外側縁には、「明治四十四年十二月一日」とあります。

同窓生の皆様にもぜひご紹介したいと思いここにその写真を掲載します。

この盃に関する資料は同窓会に残る資料にはありませ

ん。創立百周年記念誌には、「明治四十四年十一月二十日、創立十周年記念事業の一環としての附属図書館が竣工する（建設費二、一二八円八銭二厘）。近隣町村有志、卒業生等三八〇余名、一、八二四口、総額三、六二九円八五銭に達する寄付金によって建設されたものである。」という記述と「同年十二月一日に附属図書館の開講式が午前十時より本校講堂において挙行された」という記述のほか、「附属図書館完成記念絵はがき」の写真が添えられていますが、記念品等に関する具体的な記述はありません。

百十年以上も前のことですが、もしその経緯などについてご存じの方がいらっしゃれば同窓会までご連絡いただけるとありがたいです。

読者プレゼント

持丸監督のサイン本

『信じる力』を3名に

ご希望の方は、白幡同窓会ホームページからお申し込みください。詳細は本会報15ページをご参照ください。

氏名、卒業回（卒業年）、住所等を入力の上、令和5年2月末日までにご応募ください。

抽選で3名の方にプレゼントします。なお、抽選結果は令和5年3月末日に同窓会ホームページで発表する予定です。

第五回旧職員会について

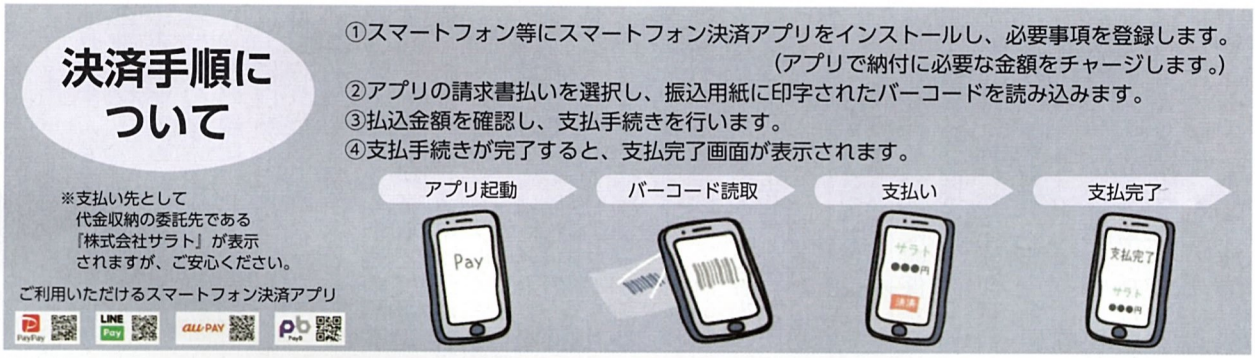
令和四年十一月十二日(土)開催予定していました第五回旧職員会は、新型コロナウイルス感染症予防対策のため、中止になりました。

協力金のスマホ決済導入

同窓生の皆様には、毎年、母校を後援するための原資になります「協力金」の納入につきましては、多大なるご理解とご支援を賜り誠にありがとうございます。

これまでの振込用紙による郵便局とコンビニでの「協力金」の納入に加えて、今回からスマホ決済に対応した支払いが可能になりました。

スマホ決済の手順については次の通りです。



編集後記

会報の中で一番読まれている「母校の想い出」のコーナーには、次年度の総会招待学年である高16回、26回、41回、56回、66回の同窓生の皆様からの思い出あふれるエピソードが満載でした。

また、「母校と私の人生」では、今回も各界で活躍されている2名の同窓生に母校との関わりや現在の仕事などについて原稿を寄せていただきました。

トピックでは、今年6月に高校野球の育成と発展に貢献した指導者として、持丸修一氏（高19回）が日本高校野球連盟と朝日新聞社が表彰する「育成功労賞」に選ばれましたので、お話を聞きました。持丸監督の人となりを彷彿させるインタビューでした。

また、20年あまり中東の国々を訪れ、特に、国を持たない民族では世界最大と言われるクルド民族の取材と撮影を続けてきた写真家の松浦範子氏（高34回）に、その当時の様子について書いていただきました。そこで紹介した松浦氏の著書も読んでいただけたらうれしいです。

最後に、今回も白幡同窓会「協力金」へのご支援を賜りたく心からお願い申し上げます。

竜ヶ崎一高の伝統は同窓生の皆様のご理解とご協力に支えられています。

今後とも竜ヶ崎一高及び白幡同窓会へのご支援をよろしくお願い申し上げます。

会報編集委員

服部　俊夫（高25回）
倉持　正男（高27回）
篠塚　文男（高28回）
川口　浩己（高29回）
有川　保（高33回）
霜村　裕通（高33回）
磯山　佳美（高34回）